

菖蒲の家と姉——水野 仙——

長林寺の竹藪に育ち過ぎた筍が、薄暗い中によき／＼と立つてゐるのを覗き／＼、それに添つた道を曲ると、私はふと思ひ出したやうに、

『みんな、菖蒲の家さ行つて見ねがい』と友達を誘ふのだつた。

ほと／＼と暖かさを保つて居る叢の間にうねつて居る道を、蒲公英が咲いて居るといつては立ちどまり、苺の木を見付けたといつては暫くそこに道草を喰つて、いつか小高い丘の上に出て居ると、こんもりとした草地の杉森を後にして、一連の長屋が目にはいる。

そこまで来ると私は急に、まだ草の實や花に心を奪られて居るみんなを呼び集めて急いで菖蒲の家へと下つて行く。少しばかり低くなつて居るところへの近道に、木の根に縋つてぴよいと崖を飛び下りるのが私は好きだつた。

『小母さあ……』といつても大きな聲を出して縁側の方から呼ぶと、

『おや、つうちちゃんかい。』といつて小母さんが出て来る。細面での目の切れの長い、赤味のない顔がどつか弱々しく見えて、そんなのが私にも無意識に小母さんは此土地の人ではないといふことを思はせて居た。

家の前に水の古い池があつて、真中にちよんぴりと築かれた島みたいなものゝ裾に、苔が一つぱい生えて居た。腐つたやうな杭の根にも、細かな青苔がくつついて居る。岸の方に生えるまゝに委されて居る菖蒲の、勢ひのいゝ葉の直立の間に、時が来れば白や紫の花が咲いた。菖蒲の家と呼び馴れたのは、私がこの家のことをいふ時に、菖蒲の花を目に浮かべてかう言つたのから初つたので、私の一家にばかり通用する言葉であつた。

菖蒲の家には時々父の姿が見えた。かうして私が、蓬摘みの歸りだの芹摘みの歸りだのに、友達を連れて寄つたりする時にも、私はよく父と顔を合せた。私の記憶の蘇る限りは父は一體留守勝ちであつた。黙つてむつりした顔が、家の爐傍に見える時は、なんだかかう氣にかゝるものがあるやうで、その時は私はおとなしくした。菖蒲の家で見る父は、家の者の誰にも見せぬやうな親しさを私に見せた。小母さんも遠慮つぽく私を可愛がつた。家の後には李だの胡頹子の樹などがあるので、その熟れる頃は友達を引張つて貰ひに來た。

小母さんには姉と同じ年位の娘が一人あつた。おくらちゃんといふのを、おくらちゃん／＼と私は呼んだ。どういふものか私はおくらちゃんを好かなかつた。小母さんに似た顔立

ちで、そののも一層ひき締つた、俗にいふつんとした顔であつた。その頃流行つた紫メリンスの前掛けをしめて、赤い半襟をかけてお針に通つて居た。同じ年頃の姉は上つ張りの筒袖を着て、下女と一緒に働いて居るのに、おくちやんは常にお白粉なぞをつけてぞろぞろとして居るのが、姉思ひの私に不感を抱かせたのかも知れない。

いつ頃どうして行き初めたのかは覚えがないが、私はかうしてちよい／＼菖蒲の家へ遊びに行つた。母や姉がめつたに其處に行つたことがないのにも、私は別段不審を抱かなかつた。

その頃、私の家の離れに下宿して居る一人の若い男があつた。——私の家は旅舎である——佐伯先生／＼と私達は呼んだ。といつて佐伯先生は学校の教員ではなかつた。私にはそれが不思議でならなかつたが、先生の部屋には澤山ないろ／＼の本があつて、繪本だの寫眞帖だのを私達に見せて呉れた。先生は子供が好きだといつて、私の友達を澤山集めた。私達は毎日／＼學校をしまふと先生の部屋に遊びに行つた。一番私達が見て飽かなかつたのは、明治幾年かに起つた三陸海嘯の慘状を描いた繪本で、髪を英吉利卷にした美人が、眞白な肌を風呂桶に浸したまゝ流れて来る圖だの、囚人を逃がす爲に巡查が牢屋を壊して居る光景だの、一番慄え上つたのは、累々とした死屍の眼玉を、無数の鳥が啄んで居る圖で、もうこそ見まいと思ひながら、また強請んでみせて貰ふのであつた。

先生は又よくお話しをして聞かせた。そして私達に讚美歌といふものを教えた。そのあとでいつも、お菓子だの美しいカード（私達はそれを油繪／＼といつて大事にして居た）だのが貰へるので、それが楽しみになつてなんでも先生のいふことを喜んで聞いた。私達はいつの間にか神様といふ言葉を覺えた。そしてそれは、天神様とか鎮守様とは一緒に出來ない、不思議なぼんやりしたものであつた。床の間に懸けてある額は、聖母マリアであるといふことも知つた。それらのものがすべて異なる匂ひを持つて私達を包んだ。

或日のこと、私は離れから怡々として爐傍の母のところへ驅けて行つた。

『お母ちゃん、また貰つたこれ佐伯先生に……お菓子と本と。この本にはなえ、爲めになるいろ／＼な面白いことが書いてあんだぞい。』と得意になつて小さな本を見せびらかした。

『なんだそれ？どれ見せてみる。』と珍らしくそこに居た父が手を出したので、私は少し怖ぢ氣つきながらそつと手渡しすると、手に取つたまゝ一枚一枚黙讀して、

『なんだこんなもの！誰に貰つて來た？』と見る／＼父の顔色が變つて居る。私は思はずびくりとして母の背中のかげに隠れた。

『ん？誰に貰つて来た、ん、つね。』と何處までも追窮するので、母もおづ／＼取なすやうに、

『離れのお客様でつさえ、佐伯先生つていふ……』

『離れの？馬鹿！耶蘇は俺は大嫌ひだ、斷つちまへ／＼そんな奴あ。』

『そんなことを言つたつて貴方、そんなことをいつたつて……お客様ですもの貴方。』

『お客様でもなんでもいゝ、耶蘇は俺は嫌ひだ！俺の家にはそんな者は置かれん！』といひ／＼その小さな本をビリビリと引つ裂いて、

『つね！こんなものア小便溜めにぶん投げて來う！』

私はどうしていゝかわからなかつた。おろ／＼しながら俄に悲しくなつて、わつと言ひたいのを咏へるうちに、冷たい涙がほろ／＼と頬を傳はつて流れた。私は急いで姉を尋ねに裏の方に出て行つた。

暫くの間私は母が猶くど／＼と父を宥めて居る聲を聞いた。さうして納戸の積み重ねた蒲團に倚りかゝつて、探して居た姉が靜かにほろ／＼と泣いて居るのを見つけた時、私は體中の涙を絞り出すやうにわつといつて姉に縋りついた。

それからどうなつたのかは、私の記憶がきれ／＼になつて居るが、なんでも佐伯先生は仙臺に行くと言つて私の家を出たのだつた。

菖蒲の家のおくらさんが駈落ちをした——いや男の後を追つかけて行つたのだ——かう言ふ噂さがふいとその時分の記憶のうちに浮んで來る——私は駈落ちなどといふ言葉の意味が解るやうになつた頃は、もうおくちやんのことなどは忘れて居た。

倉の前の露路に、月見草の黄色がだん／＼薄暗につつまれて行くと、軒のあたりに綾を組んで居た蟲のかげも、青味を失つて來た空の色に紛れて、急に家の中の灯影が戀しくなつて來る。なんとなく寂しい晩だつた。

日が暮れてから遅く草鞋をぬいだ旅商人の、しまひ湯を浴びる音がさびしく聞えて來る。その宵の靜かさが、子供心にも氣になつてならないやうな夜であつた。いつもの通り母と共に納戸に寝たまでは覺えて居るが、時はどの位経つたのやら、ふと誰かゝ叫ぶやうな大きな聲をたてたのに、むくりと起きた母の胸の下に私も目を開いた。

それからの光景は、私の小さな心に記憶も許さないほどの驚きを與へた。井戸から引揚げられた姉のぐつたりとした屍が——その時は私は全くもう死んだものと思つて見て慄えた——泣き叫ぶ母や、何處からか駆けつけた父や隣家の人達に圍まれて、藁火の焰に

暖められて居るのを、私はたゞ泣くことも出来ずに慄えて見て居た。ひら／＼と燃えたつ赤い炎の光りに、人々の顔は恐ろしいほど引きしまつて居た。絶えず姉の名を呼び、生ける母や父の聲が、慙へるやうに、嘆くやうに、責めるやうに詫びるやうに、また悲しむやうな響を籠めて、更け切つた夜の冷たい空気を顫はした。

一束の藁が灰になつて、また新たな焰がめら／＼と暗い空にあがつた。狂氣のやうになつた母が、前後も忘れて父に喰つてかゝつた言葉のうちに、私は初めて菖蒲の家の性質を知つた。思ひ惑つたやうな父がおろ／＼と姉の胸のあたりを撫でゝ居る手も慄えて居た。

しら／＼と白みかけた暁方から、しよぼ／＼と降り出した小雨が、軽く嵩んだ藁灰の上に僅かづつの湿りを與へて居た。

姉は漸くのことで蘇生つた。

何を問はれてもたゞさめざめと泣くのみだつた姉は、それから暫くの間床について居た。日に幾度となくその枕許を窺ふやうに掠めて通る自分の影が、われながら如何にも寂しさをうに見えて、私はその部屋の前の縁の柱にもたれては暮れ行く空を眺めた。そしていつか袂の先を噛みながら泣面をかい居るのであつた。

菖蒲の家の小母さんは、現在母の従妹に當つて居る人で、それが父の妾なのであつたさうだ——私はだん／＼物事を考へる子となつた。

佐伯先生の形見らしい小さな金の十字架が、その夜の姉の胸にしつかと抱かれてあつたことは、母より以外に知るものはなかつた。私は一かどの女になつてからそのことを母から聞いた……。

底本…「青鞥」大正二年七月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年七月三日

改訂…令和六年五月三十日

[水野仙子作品年譜](#)に戻る